



神奈川県

かながわスポーツタイムズ

平成29年(2017)

レフェリーの振る舞いを大切にしたい Vol.65

日本サッカー協会プロフェッショナルレフェリー

扇谷健司



スポーツの価値を高めるためにアンチ・ドーピングに関心を

聖隷横浜病院薬局長 金田光正

総合型地域スポーツクラブ活動紹介

スポーツリーダーバンク登録指導者活動だより

レフェリーの振る舞いを大切にしたい

日本サッカー協会プロフェッショナルレフェリー

扇谷 健司

(おおぎや けんじ)

神奈川県立藤沢西高校から青山学院大学を経て、フジタサッカークラブ（現湘南ベルマーレ）でプレーする。選手を引退後、レフェリーの道へ。1998年に1級審判員取得。2004年からJリーグの主審を担当する。2007年に日本サッカー協会スペシャルレフェリー（現プロフェッショナルレフェリー）となる。国内のトップレフェリーとしてJリーグや天皇杯などの国内大会の他、2007年から2010年までは国際主審として国際試合も担当。選手、レフェリーとしての経験が豊富な扇谷健司氏にレフェリーに対する考えを伺いました。



プロフェッショナルレフェリー

プロフェッショナルレフェリー（以下PR）は、基本的に1年契約で活動します。Jリーグ、リーグカップ、天皇杯などの国内試合の他に、国際審判員であれば国際試合も担当します。大体年間40試合から50試合を担当し、試合の合間にはコンディション維持のためのトレーニングを行っています。担当できる試合はカテゴリーごとにレベル分けされていて、年1回シーズン前に、日本サッカー協会（JFA）が指定した内容のフィットネステストというのをクリアしないとそのカテゴリーの試合を担当できません。しっかりとトレーニングしておかないとクリアできないような基準です。日本のトップであるJ1リーグ担当主審のフィジカルテスト基準は、40m走6秒以内をインターバル1分で6本。その後400mトラックを使って75mを15秒で走って25mを18秒で歩いてを繰り返してトラックを10周します。全部で40本のインターバルになりますね。1月はそれに向けたトレーニングをします。テストをクリアした後は、2月中旬にシーズンが始まりますので、コンディションを整えます。シーズンに入ると毎週最低1試合は担当になります。どの試合を担当するかは日本サッカー協会が決めるので自分では選べません。割り当てられた会場の試合を担当します。日本のシーズンはどんどんと暑くなっていき、シーズンの終盤が涼しくなったかなという感じで終わるので体力的にはとてもきついです。できるだけ疲労を抜き、次の試合に向けて準備していけるかということの繰り返しです。

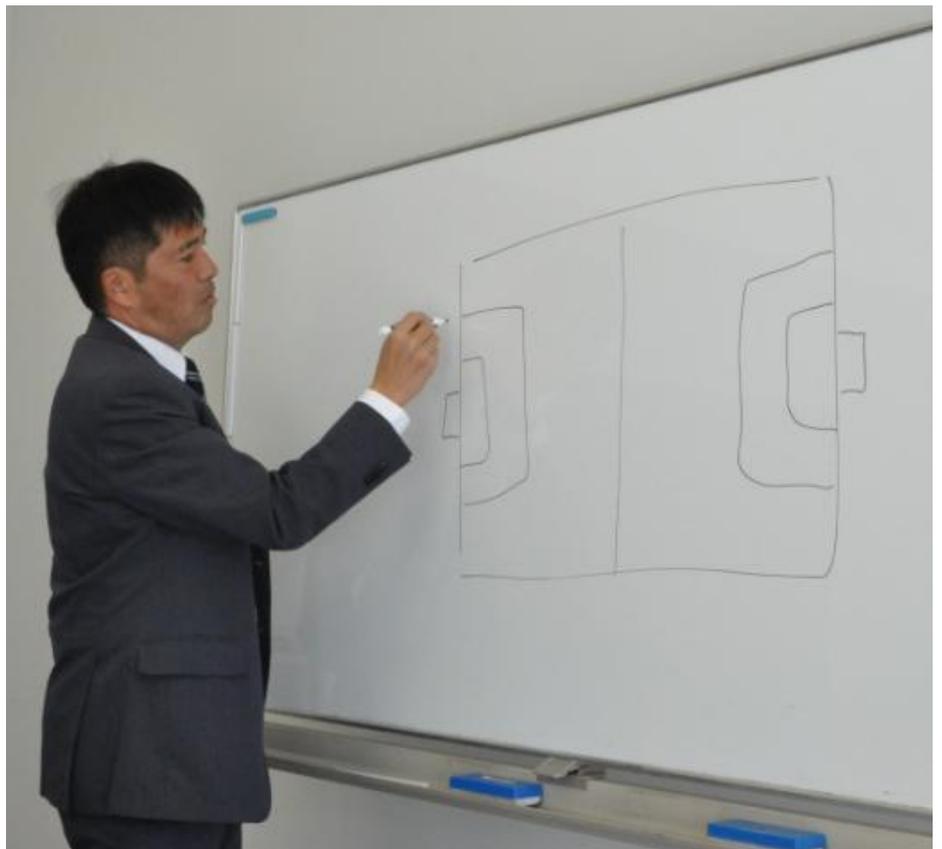
判定をするという責任は大きい

試合中に行う選手との会話には敬語を使うようにしています。自分のスタイルとして、選手とは友達ではないのでフランクになりすぎないようにそこには線を引いています。もう習慣になっているので意識しているというわけではないですが、我々レフェリーの仕事は判定しなければならない。「判定する」ということの責任は大きいと思っています。それから、試合では常に同じ

ような精神状態でいられるように心がけています。試合前のレフェリーは集中して静かなイメージがあるといわれますが、私は結構話をしたりしながらリラックスしています。試合開始前の控え室から出る2、3分前くらいから集中する感じです。どのようなゲームでも普段と同じ精神状態で控え室を出られるということがとても大切です。また、皆さんがレフェリーをした時に、判定した後に選手などの反応で、これは間違っただなと思うことがあると思います。でも、それを気にして、「こっちの反則をとったから次はあっちに」というようなことをしてしまうと試合はどんどんおかしくなります。それはやってはいけません。試合中は割り切るようにしたほうが良いと思います。ミスを引きずるとまたミスをする。すると、1つのミスではなく2つ、3つのミスとなっていきます。

専用スタジアムの魅力

私が一番好きなスタジアムは横浜市の三ツ沢球技場ですが、埼玉スタジアム2002など陸上トラックがないサッカー（球技）専用スタジアムに、大勢の観客が入っている中でレフェリーをするのが好きです。選手はそういう環境だと基本的にプレーに集中します。観客の声が近くから聞こえるので、私に選手の声が聞こえ過ぎないというか、選手が何かを言っているにもかかわらず歓声が届きません。陸上トラックがあると選手の声が必要以上に聞こえてきてしまい、選手もレフェリーもお互いに集中しづらいと感じることがあります。



レフェリーの魅力

レフェリーの魅力は、常に満点がとれないということです。完璧なレフェリーはいなくて、どんなに上手なレフェリーでも1試合の中でいくつかの課題が出てきます。なかなか100点が取れません。もっと良くしようとして次の試合に臨み課題をクリアすると、また違う課題が出てきます。また、その課題をどのようにクリアするかということも大切です。レフェリーというのは、選手のためにやっていますので「自己満足」ではいけません。自分が納得していても選手が納得していなければやはりだめだと思います。「選手に納得してもらおう」ということをクリアしながら、自分の課題もクリアするという難しさが楽しさなのかなと思います。「次はもっと良いものを目指してやっ払いこうと思えること。」それが魅力だと思います。

過去の経験が今に活かしている

私のレフェリー観を変えた試合だと思っているのは、2007年11月のJ1リーグ第33節の浦和レッズ対鹿島アントラーズの試合です。当時首位のレッズに2位アントラーズが挑む天王山で、レッ

ズは勝つか引き分けで優勝という試合でした。埼玉スタジアム2002に6万2千人を超える観衆が詰め掛けるすごい雰囲気の中での試合でした。その年はPRになって1年目でしたが、緊張もあり精神状態のコントロールが普段の試合とは違い難しいなと感じる経験でした。けれども、その「上手くいかないな」と感じた経験は今にとっても生きていますし、PRになって10年になり、様々な経験もしてきているので、Jリーグのプレーオフや降格がらみの試合でも落ち着いて試合に入れています。このような試合は、選手やクラブの将来が変わってしまうような試合です。選手がプレーに集中できるようにレフェリーが存在するものだと思いますが、そういう試合でレフェリーが緊張や興奮をしてしまうと、選手がさらに神経質になり、レフェリーや相手選手に対して、試合とは関係のない「ファイト」になってきてしまうことがあります。そういう状況にしないために、言葉遣いも含めて我々レフェリーの「振る舞い」がとても大切だということです。

レフェリーの「たたずまい」

外国人のトップレフェリーの方からもっと学びたいなと思うことが、その「振る舞い」です。そういったものが日本人にはまだ足りないのかなと感じています。例えばファールかどうか、オフサイドかどうかというように判定だけをとりだすと、日本のレフェリーはかなり正確だと思います。ワールドカップに参加した日本のレフェリーの評価も高かったですし、日本のレフェリーのレベルは世界で一定の評価を得ていると思います。ただ、「レフェリー」という「たたずまい」というか、「醸し出す雰囲気」というのは、ある程度まではできているとは思いますが、世界からもっと勉強しないといけないなと思います。

サッカーというスポーツを楽しむことが大切

今は、審判員の資格取得の年齢制限が撤廃されました。高校生、大学生の頃から上級の審判のカテゴリーを目指して頑張るレフェリーもたくさん出てきました。上級レフェリーを目指す方に伝えたいことは、「まずはサッカーというスポーツを楽しんでください」ということです。サッカーはとても奥が深いスポーツです。それがわかってくるとレフェリーをするのが楽しいと思います。サッカーというスポーツが分からないとレフェリーも難しい部分があるので、プレーする



ことも大切です。それから、レフェリーはそれぞれに特長があります。スプリント力があるとか、ジェスチャーが上手いとかです。どれが正しいということではなく、それぞれが特長を把握して、上手く使って選手を試合に集中させていく。自分の特長をしっかりと出し、活かして行く事が大切です。

レフェリングで選手の成長も変えられる



試合中のレフェリーはあまり選手と会話せずに判定だけしているように思われるかもしれませんが、多くのレフェリーは選手と会話をしながら試合を進めています。レフェリーというのは終わったものを判定するだけが役割ではありません。「いかに反則をさせないか」とか、「いかにプレーに集中させるか」というのもレフェリーの大事な役割のひとつです。小学生のグラウンドでレフェリーが積極的に関わって反則ではない激しいプレーやルールを教えたり

すれば、周りの保護者やコーチもレフェリーの声が聞こえるので理解してくれると思います。レフェリーの判定が選手の成長に与える影響というのは、皆さんが思っている以上に大きいと思っています。例えば、小学生の時にある試合でタックルに行き、反則をとられ、その選手がそれから同じような場面でタックルに行かなくなったとします。それが、ある程度年齢が進んだ時に「戦えない選手」と言われてしまうこともあるかもしれません。また、試合に勝ちたいから、わざと倒れて反則されたように見せる。レフェリーから見えないように相手を引っ張るということをしたとします。それが上手くいくと「次もやってみよう」となり、楽ばかりして、しっかりとプレーすることができない選手に成長してしまいます。でも、反則したときに正しいタックルを教えたり、「ズル」をしてでも勝つということをしないように注意していけば、違う選手に成長すると思います。試合の中でプレーではないことに集中しただいたというのは見ていて分かると思います。今の指導者はそこをしっかりと選手に言ってくださっている方が多いと感じていますが、たくましく強い選手を育成するためには、指導者、選手、チーム関係者、審判、運営担当など、サッカーに関わる皆で協力することが大切です。そして、強い日本のサッカーを作り上げていきたいですね。

扇谷 健司（おおぎや けんじ）日本サッカー協会プロフェッショナルレフェリー

略歴 1971年1月3日生。神奈川県茅ヶ崎市出身。

小学校2年から茅ヶ崎市の小和田FCでサッカーを始める。神奈川県立藤沢西高等学校から青山学院大学を経て、フジタサッカークラブ（現湘南ベルマーレ）に入団しプレーする。選手引退後レフェリーの道へ。1998年に1級審判員取得。2004年からJリーグ主審担当。2007年から2010年国際主審。2007年日本サッカー協会スペシャルレフェリー（現プロフェッショナルレフェリー）。

総合型地域スポーツクラブ活動紹介

パーム・インターナショナル・スポーツクラブ【茅ヶ崎市】

茅ヶ崎の丘陵地帯の緑に恵まれた環境の中で、皆様が充実したスポーツライフを楽しんで頂けるよう、テニスを中心に、ゴルフやサッカーなど様々なスポーツを展開しています。クラブ代表の元プロテニスプレーヤー杉山愛は「楽しいと思える事が一番で、子どもから高齢者まで、もっとスポーツを楽しんでもらい、スポーツで笑顔を作り、スポーツの素晴らしさを伝えていきたい。」と想いを掲げ、クラブではこの想いをもとに、スクールやスポーツイベントなど日々の活動を行っています。是非、パームの活動にご参加ください。



NPO法人相模原ライズ・アスリート・クラブ【相模原市中央区】

創設のきっかけとなったのは、スポンサーの撤退によって解散となったアメリカンフットボールチームの再結成です。地域に根差すチームとして、「スポーツを通じて、子どもたちの健全な心身の育成や生涯スポーツ社会の実現、競技力の向上を目指し、スポーツが地域コミュニティとしての機能を果たすことで、スポーツ文化の発展と私たちの健康で文化的な社会の構築に寄与すること」を目的とし、2007年に総合型地域スポーツクラブとしてスタートしました。

時にはトップチームの選手やチアメンバーが指導者となり、フラッグフットボールやタッチフットボール、チアリーディング等のスクールを中心に運営しています。

NPO葛野スポーツクラブ【横浜市泉区】

2012年から葛野小学校の施設を利用し、子供から高齢者までスポーツを楽しめる地域づくりをしようと活動しています。施設を利用する登録団体等の協力により、バスケットボール、サッカー、陸上、健康体操などのスポーツ教室を開催する他に、指導者向けのテーピング講習やAED講習などの地域貢献事業も開催しています。お近くにお住まいの方はホームページをご覧ください、お好きなスポーツで汗を流してリフレッシュするために是非一度足を運んでみてください。



「みんなが一緒に楽しめるスポーツライフの構築を！」

～施設再整備に期待すること～

神奈川県立体育センター所長 中園 雅勝

体育センターは、昭和43年に設置され、保健体育科教員の研修や体育・スポーツに関する調査・研究を行うとともに、総合スポーツ施設として県民のスポーツ振興拠点としての役割を担ってきました。設置から約50年が経過し、施設・設備の老朽化が著しく、バリアフリー化もなされていないことから、隣接する総合教育センターと一体的に再整備を行うことになりました。現在、体育センターの本館棟が取り壊されています。先輩たちが築き上げてくれた神奈川県の体育・スポーツの中核を担ってきた施設がなくなっていくのを見ると非常に寂しい思いでいっぱいです。しかし、この再整備は、新たに素晴らしい施設へと生まれ変わるためのもので、神奈川県の体育・スポーツの未来に向かってとても重要なことと考えています。



私は、体育センターで平成12年度から5年間、県内のスポーツ情報のネットワークを構築することと総合型地域スポーツクラブを多く作るという、とてもやりがいのある仕事をさせていただきました。当時、総合型地域スポーツクラブと障がい者スポーツを盛り上げていくことができるような体育センターの将来構想を描いたのを覚えています。障がい者の方と健常者の方が一緒になってスポーツを楽しむことができる施設のあり方も考えました。再

整備計画を見ると、そのような内容も加わっているのです、とても期待しています。

現在、体育センターではスポーツを通じて地域や家庭においてコミュニケーションを深める機会として「スポーツコミュニケーションデー」を開催しています。子供から成人のみなさんが多く集まって、本当に楽しそうに喜んでスポーツをしていただいています。また、保健体育科の教員研修や体育・スポーツに関わる調査・研究を行っている全国でも数少ない総合スポーツ施設でもあります。保健体育科教員の研修と子供から大人まで生涯を通じてスポーツを楽しむ環境が整っている場はとても貴重です。このような素晴らしい体育センターで、再び勤務していることを誇らしく思っています。これからも、年齢や障がいを越えてスポーツを楽しむことができるような施設にしていきたいと考えています。そして、「みんなが一緒に楽しめるスポーツライフの構築」を目標として、心と体の健康づくりを目指す体育・スポーツ活動の推進を行っていきたくと思います。

終わりに再整備について触れさせていただきます。体育センターは、これまで通り保健体育科の教員研修と県民のスポーツ振興の拠点として重要な役割を担っていきます。一方では、数年後に東京オリンピック・パラリンピックやラグビーワールドカップなど県民のみなさんが大きな関心を集める国際的なスポーツイベントが控えています。再整備は競技スポーツ・生涯スポーツ・障がい者スポーツを盛り上げる絶好の契機と捉え、子供たちをはじめ、すべての県民のみなさんに喜ばれる施設としてしっかり整備していきたいと考えています。引き続き、県民のみなさんの御支援、御協力をよろしくお願いいたします。



スポーツの価値を高めるためにアンチ・ドーピングに関心を

聖隷横浜病院薬局長

金田 光正

(かねた みつまさ)

スポーツに特化した薬剤師の資格「スポーツファーマシスト」を取得。公益財団法人日本バレーボール協会アンチ・ドーピング委員会副委員長として、アスリートのアンチ・ドーピング活動を精力的に行う。公益財団法人神奈川県体育協会では競技力向上委員会委員として国民体育大会に参加する選手へのアンチ・ドーピング指導を行うなど、スポーツ現場の状況を熟知している金田氏にアスリートのドーピングに対する考えを伺いました。



ドーピングが引き起こす問題

ドーピングの世界年間陽性（違反）率は2～3%となっています。日本では0.2～0.3%がドーピング違反になっています。海外でのドーピングは、その多くが「意図的なドーピング」です。「筋肉増強剤」や「蛋白同化ステロイド」と言われる筋肉をつける薬物の使用が全体の60%以上を占めています。世界的に大きな問題となっているのが、国の威信をかけ、メダルが取れさえすれば良いという考え方に成り立っている「国家ぐるみのドーピング」です。「薬物を飲まないのなら選手を辞めろ」と飲まざるを得ないような状況を作ったり、選手自身が知らない所で薬物を摂らされたりしていました。薬物によるドーピングは、女性の場合だと、妊娠・出産したときに奇形児が生まれやすいとか、薬の影響で男性として生活していくような状況を生み出され、実際に、髭を生やして男性に見えるような風貌で生活している人もいます。また、選手が知らずに薬物を飲まされていたというケースでは、自分の力で一生懸命に練習し努力してメダルを獲得したと思っていたものが、後になってドーピングによってもたらされていたことが分かり、自身が人生を捧げてきた時間や残した記録が全て否定されてしまうこともありました。なかには薬物の影響で、自分自身の気持ちのコントロールができなくなり自殺してしまうというケースもありました。こういった問題が実際に起きているのです。

日本ではドーピング違反となるのは「意図的」というよりは「知識不足」によるものが多く、飲んだ「薬」や「サプリメント」に実は禁止薬物が含まれていたのが結果として違反になってしまったというケースです。これは「うっかりドーピング」とも言われています。

日本ではドーピング違反となるのは「意図的」というよりは「知識不足」によるものが多く、飲んだ「薬」や「サプリメント」に実は禁止薬物が含まれていたのが結果として違反になってしまったというケースです。これは「うっかりドーピング」とも言われています。



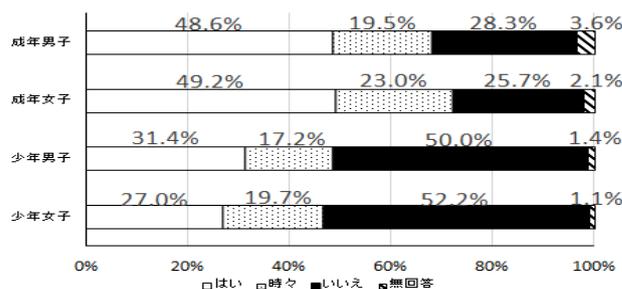
サプリメントと薬の違い

ここ数年の日本の傾向として、陽性となるものの中に「サプリメント」に由来するものが増えてきています。「薬」と「サプリメント」の大きな違いですが、薬は「薬事法」という法律があって、「中に入っている成分を全て表示しなければならない」という決まりがあります。言い方を変えると、その成分を全部調べれば禁止薬物が含まれるものかどうか分かるということです。一方、サプリメントというのは薬ではないので、中にどういった成分が含まれているかを「全部」は表示しなくても良いという曖昧なルールとなっています。世界アンチ・ドーピング機構（WADA）が世界で販売されているサプリメントを調べたところ、約15%に禁止薬物が含まれていたという報告があります。表示されているものがOKだとしても全部が表示されていないのだから「本当に大丈夫なのかは分からない」ということです。調子が良くなったとか、筋肉がついてきたと喜んでいたら禁止薬物が入っていたということがあるかもしれないということです。日本アンチ・ドーピング機構（JADA）は、この問題を重く見て、世界的には非常に珍しいことですが、JADA公認のサプリメントをインターネットで公開しています。選手は「食べ物」「薬」「サプリメント」など摂取するもの全てに責任を負うことが求められる時代になっているのです。

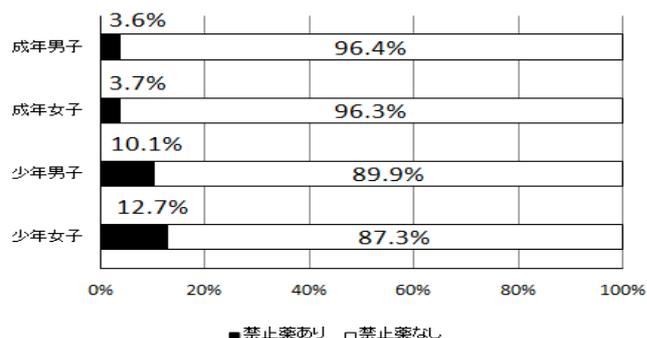
指導者もアンチ・ドーピングについての意識を持って欲しい

右の図は、2016年のいわて国体に参加した神奈川県代表選手の調査です。「医薬品を使う際に禁止薬が含まれているかどうかを確認しているか」という問いに対して、成年種別では20～25%が、少年種別になると50%以上の選手が調べないで使用していると回答しました。使用している医薬品を調べたところ禁止薬物を含んでいるものの使用がみられました。2012年に行った調査ではドーピングについて約3割の選手が「相談する人がある」と答え、その半数以上が、トレーナーや教員やコーチと回答しています。このことから、スポーツファーマシストだけが「この薬はいい」「これはだめ」と言えばすむ問題ではなく、選手が競技に集中するためにも、トレーナーや指導者も同じ意識を持って取り組んでいく必要があると思います。このようなことからトレーナーや指導者にもアンチ・ドーピングへの意識、関心を強く持って、選手が使用する薬やサプリメントに対して、慎重に対応していただきたいと考えています。特に少年種別では、薬やサプリメントに対する危険意識が低いので、指導者には十分注意していただきたいと思っています。

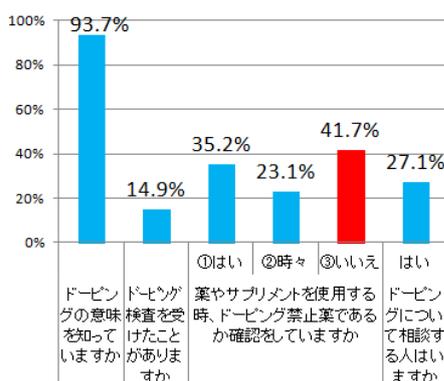
薬やサプリメントを使用する時、ドーピング禁止薬であるか否かを確認していますか？



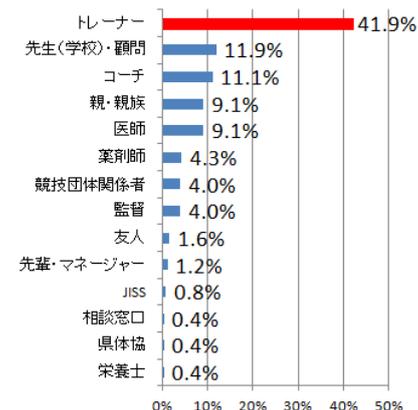
薬の内訳



意識調査 (2012年度夏季国体代表選手)



主な相談相手 (2012年度夏季国体代表選手)



様々なドーピング検査

ドーピングの検査方法は「尿検査」と「血液検査」です。血液検査の場合は、医師や看護師など採血するために必要な資格を持つ者が実施します。選手は、どちらの検査になるかは事前には知らされず、どちらの検査を指示されたとしても基本的に拒否することはできません。検査は大きく2通りで、「競技会検査（大会後の検査）」と「競技会外検査」です。「競技会外検査」とは、いわゆる「抜き打ち検査」です。日本で抜き打ち検査を受けるのは、一般のアスリートではなくて主にRTPA※というJADAから指定されている700名程度のトップアスリートになります。その選手達は、24時間自分のいるところをインターネットで登録しなければならないので、その情報をもとに抜き打ち検査に行きます。「血液検査」は、血液の中に入っている薬物を調べるということも目的のひとつですが、「血液ドーピング」が行われていないかということも検査しています。血液ドーピングの一例として、自分の血液を抜いて3週間程度保存します。血液が抜かれた体は再び血液を作り、元の血液の状態に戻ります。そして競技前に、保存しておいた血液を体内に戻すと、血液中のヘモグロビンの量が増えるので、酸素運搬能力が高くなり持久力が高まるといった仕組みです。血液ドーピングをしても尿検査では分かりません。これを防止するために、定期的に抜き打ち検査で血液の成分を調べておくことで、日常と違う血液の状態になっていないかということを確認することができます。また、ドーピングには、「メカニカルドーピング」というものなど他にもいろいろな方法があります。これは、競技で使用する道具をドーピングすることです。例えば、自転車の内部にモーターを組み込み「アシスト自転車」にして補助的な力を得るとか、卓球ラケットのラバーに反発力の強い接着剤をつけて、強烈なスピンのボールを打つなどということです。選手は、使用する道具についても「潔白」を証明しないといけなくなっています。逆にそれを証明することで、競技のレベルや、人気が上がります。正々堂々と戦ってより高いレベルに挑戦していくというスポーツ本来の価値を守ることにつながっていくのです。



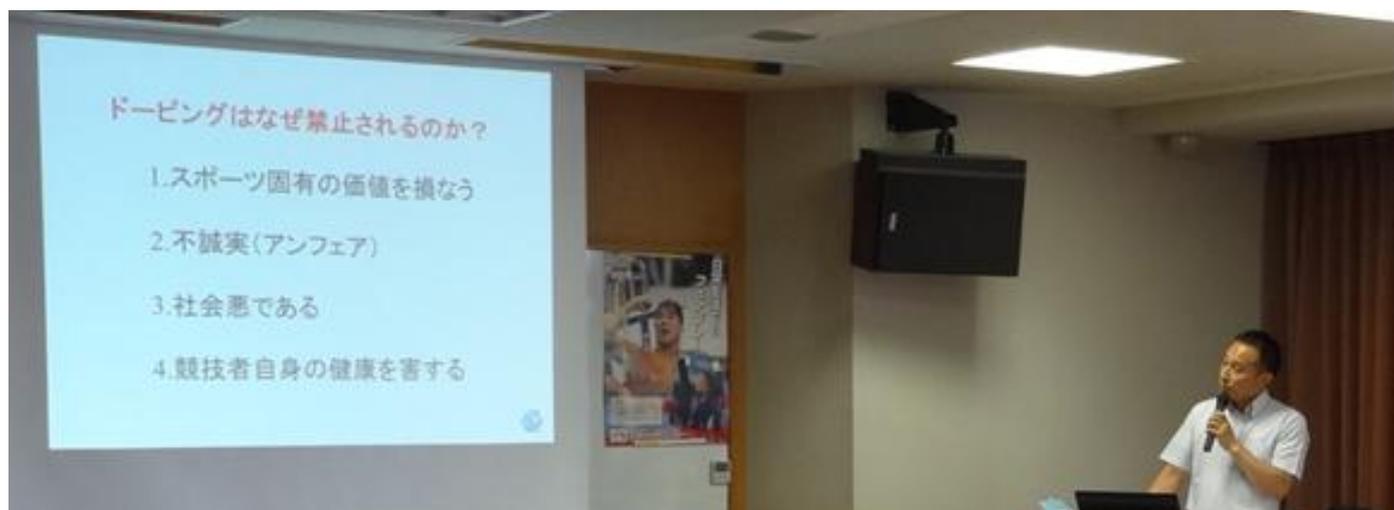
スポーツファーマシストの役割

選手の多くは、競技力を高めるために日々練習に励んでいて、アンチ・ドーピングのことには正直あまり意識を向けにくいわけです。ですから年々変化するドーピング検査で違反になる薬物に対応し、頑張っている選手達をサポートしていくことが私たち「スポーツファーマシスト」の役割と言えます。「スポーツファーマシスト」になるには薬科大学や薬学部に入り6年間勉強して薬剤師の国家資格を得るということが第一条件です。その後に講習と試験を受けて資格を取得します。この制度が始まったのは2009年からで、4年に1度、試験を受けて資格を更新します。「スポーツファーマシスト」というスポーツに特化した薬剤師の資格を認定しているのは世界でも日本だけで、現在は全国で約7,000人が活動しています。

※ 検査対象者登録リスト・アスリート (Registered Testing Pool Athlete) の略

競技の価値を高めるためにアンチ・ドーピングに関心を持とう

ドーピング検査は、身の潔白を証明するという自分で出した記録をしっかりと承認してもらうための検査とも言えます。良い記録が出てドーピング違反では失効してしまいますし、選手生命自体が終わってしまう可能性もあります。でも検査をしなければ、「違反をしているかもしれない」という目で見られてしまう可能性もあるわけで、しっかりと検査を受けておけばクリーンであることを証明できます。「意図的」であろうと「うっかり」であろうと違反は違反。世間からはそういう目で見られます。選手も今までのように「知らない」ということは通用しません。年々ドーピング検査で違反となる禁止物質は増えているのが現状です。最新の情報に注意しよう意識することが大切です。選手が全てを一人でやろうとせず、相談できる人や窓口をぜひ作ってほしい。神奈川県では私が所属する神奈川県体育協会も窓口になっていますので、身近にいるスポーツファーマシストと同様に活用してもらいたいですね。



少し前までは、アンチ・ドーピングというと検査をして「大丈夫です」「違反です」という「取締り」が主でした。今は、「ドーピングをしない・させない」という「啓発」と合わせて両輪で動いていくという考え方になっています。神奈川県体育協会では、この啓発活動にも力を入れていますので、セミナー開催やアンチ・ドーピングに関する相談などありましたらお気軽にご連絡ください。スポーツ選手は正々堂々と全力で競技し、クリーンで、皆の目標とされるような選手になってほしい。そのために微力ながらサポートを続けていきたいと考えています。

金田 光正 (かねた みつまさ) 聖隷横浜病院薬局長

略歴 1965年11月8日生。千葉県出身。

星薬科大学大学院を修了し博士(薬学)を取得。スポーツファーマシストとしてスポーツ現場を支える。現在は、公益社団法人神奈川県病院薬剤師会理事。公益社団法人神奈川県薬剤師会ドーピング・ホットライン担当。公益財団法人日本オリンピック委員会強化スタッフ(医・科学)。公益財団法人日本バレーボール協会アンチ・ドーピング委員会副委員長。公益財団法人神奈川県体育協会スポーツ医科学委員会委員・競技力向上委員会委員など、多くの役職を担っている。

スポーツリーダーバンク登録指導者活動だより

金子 健三 (かねこ けんぞう)

登録種目：ソフトボール

実業団チームでソフトボールを始め、県内各大会優勝、関東大会、全国大会に出場。国体成年チームの監督も務めた。現在は、神奈川県ソフトボール協会普及委員長、神奈川県協会常務理事、日本ソフトボール協会審判員、日本体育協会ソフトボール上級指導者、寒川町ソフトボール協会理事長、寒川町体育協会理事、一般社団法人寒川総合スポーツクラブ理事及び小学生ソフトボール部指導者、寒川町家庭婦人ソフトボールクラブ監督など多方面で活躍している。



小学生の頃から野球が好きで、入社した会社にソフトボール部があり、先輩に誘われ入部し、ソフトボールの各大会に外野手として出場。その後、投手となり県内大会、実業団リーグ等監督兼選手として大会に出場。国民体育大会ソフトボール競技成年男子2部では監督も経験しました。現在は、寒川町の町内大会で投手で出場しています。また、関東ソフトボール協会普及委員長を務め、神奈川県ソフトボール協会普及事業として、毎年、親子親善ミニソフトボール大会開催や県内小学校を訪問してのソフトボール教室を実施しています。寒川町のイベントでは、初心者を対象にソフトボール教室を開催し、キャッチボール、バッティング、ピッチング等の指導を行っています。一般社団法人寒川総合スポーツクラブでは、設立時より毎週土曜日午前中に、ソフトボールの指導をしています。その他にも、家庭婦人ソフトボールチームでは監督として、選手を指導し練習や試合に出場しています。また、不定期ではありますが、寒川町内中学校ソフトボール部の指導に行くこともあります。ソフトボールはオリンピック東京大会での開催が決まり、会場も横浜開催予定になっています。ソフトボールは老若男女ができるスポーツです。体験教室に来られた小学生に楽しかったと思われるような指導をめざし、常に精進するとともに、多くの人達が楽しめるように普及活動も継続していきたいと思ひます。



スポーツリーダーバンクとは

神奈川県内で活動でき、(公財)日本体育協会公認指導者、県や市町村が養成した指導者などの資格・要件をお持ちの方に登録いただくことによって、その種目の指導を受けたいの方々に紹介させていただく制度です。登録を希望される方は、「登録・紹介事務取扱要領」等をご確認のうえ、「登録申請書」に必要事項をご記入し、資格を証明する書類のコピーとともに、郵送(持参可)またはファクシミリにて、お送りください。県立体育センターホームページからも、「登録・紹介事務取扱要領」や「記入例」等をご覧になれます。

「かながわスポーツタイムズ」に関するご意見、ご感想をお待ちしております。

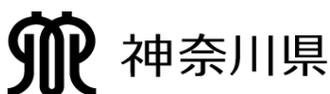
発行回数 年2回(8月、3月)

神奈川県立体育センター

TEL 0466-81-2570(代表)

FAX 0466-83-4622

〒251-0871 藤沢市善行7-1-2



ネットでもツイッターでも最新情報発信中!

県立体育センター

検索

体育センターホームページ



体育センターツイッター

